2003年（平成15年）5月 18日 第46号

Feeling excited

Dance with Heart
The Kikunokai Troupe
We are burning with enthusiasm
in creating national art for the new era.
Chairperson Michiyo Hata

日本のおどり

発行：舞踊集団 菊の会
〒161-0031
東京都新宿区西落合2-21-23
03-5983-6001（代表）
菊の会京都八瀬研修所
〒601-1254
京都市左京区八瀬野瀬町10
075-712-8701（代表）
http://www.kikunokai .co.jp

Dancing from the heart

三隅治雄作　舞踊劇「阿国かぶき」より

KIKUNOKAI
TOWARD-REGENERATION

財団法人民族芸術交流財団
理事長 三隅治雄
Haruo Misumi

菊の会再生の年へ

畑道代会主が、昨年、伝統芸術最高の賞である伝統文化ポーラ賞を受賞され、また、菊の会の公演が文化庁の芸術団体重点支援事業の一に選ばれるなど、よいこと続きで、これも、会主と菊の会会員の、長年にわたる真摯果敢な活動が、広く国中の評価を得たことの証しと、拍手を贈ります。折りしも、今年は、会創立三十周年を終えての新生第一年目で、十二月には八年ぶりに拙作の「阿国かぶき」を上演いたします。出雲の阿国が初めてかぶき踊を京で演じたのが一六〇三年で、それからの四百年目を記念しての企画でもありますが、作のテーマは「いまをただ、一期と踊れ」でした。一期は生涯のこと。「今日ただいまに全生涯の生命をかけて踊れ。」の意味です。踊り手にとって、昨日の栄光も過去の夢、毎日を新たな生命の誕生と捉え、その日立つ舞台と観客に、そのフレッシュな生命すべてを噴射する。阿国かぶき踊りが戦国争乱の苦に倦んだ民衆を歓喜させたのも、その「一期と踊れ」の気迫であったかと思うのですが、じつは、そのテーマを選んだのも、畑さんの日ごろの生き方、考え方を見ていたからで、つまりは畑さんと菊の会の生きざまを「阿国かぶき」に重ね合わせたのです。そして、阿国かぶきが歌舞伎芝居を興す原動力となったように、菊の会の活動が新たな日本の舞踊創造の起動力になることを期待している、わたしです。

舞踊家の条件

三枝孝榮

欣喜雀躍という言葉がある。人間誰しも嬉しい時に自然に体が動き出し、何となく踊り出すさまをいう。例えば幕末に、「え、じゃないか」という民衆の踊りが流行したことなどみても人間の本能に踊り出す要因がある。しかし「舞踊家」となると職業としてプロの道をおさめる事をいう。慶長八年出雲の阿国が京で「かぶき踊り」を興行してから今年は丁度四百年だが、その「風流」や「ややこ踊」「念仏踊」が若さを躍動させて人気を博して以来、元禄から享保、宝暦と時代と共にさまざまの名優が今に残る歌舞伎劇を確立し、やがて天明から浄瑠璃系の名作舞踊、文化文政の変化舞踊とその歴史をきざみ、永い年月の間に先人が工夫し育くまれた日本舞踊。この古典の基礎を原点とするのは当然のことである。そして先ず第一に、一にも二にも研鑽、なかなか自分で納得がいかないとしても、自らの芸を見せる時は何日も勤めることは少ない、如何なる場合にも日頃の稽古がものをいう。第二に自分の踊る作品の目標をたてる。教示されたものを自身が咀嚼（そしゃく）して内容を把握する。第三に見る人に感動を與えることを考える、どこか一カ所でもいい、自分でその踊りに没頭し、いいものを見たと思わせる自信を持つ。第四に時間のある限り他人のおどりをよく見ること。流儀の違いもさることながら上の人は勿論、下の人の踊りもみる。必ずその中に自分にとって印象に残ることがある。それが長い年月の間に必ず役に立つ筈である。舞踊家たるものは終生勉強の一生である。その多くは自分の好きな道として選んだ人であろうが、その道はきびしいものと意識すべきである。常に謙虚でありたいし、生半可なことでは出来ない精神力も必要であろう。

（舞踊評論家）

畑道代さんと「菊の会」賛

舞踊愛好家
藤井修治
Fujii shuji

僕はほとんどの現代日本人と同じく欧米の文明文化にとつぷり漬かって生きて来ました、そしてその畑さんが一方では尾上菊乃里として王朝時代の貴婦人を雅びに踊って堪能さ

新たな出発を飾る新春公演

菊の会では昨年創立三十周年の佳節を迎え、今年三十一年目の新たな出発を致しました。その開幕の一月二十六日、入間市共催事業として埼玉県入間市民会館で、又二月二十九日には神奈川県座間市のハーモニーホールに於きまして新春公演を盛大に開催しました。入間市長木下博様、座間市長星野券司兼上がそれぞれ即多えよ日本列島」では十八演目を一気に上演、新春にふさわしい華やか舞台で出発を飾る事が出来ました。

東京新聞主催全国舞踊コンクール。今年も一位、二位、に入賞。

四月二十日に全国舞踊コンクールの本選が行われ、今年は小学五年の山沢優子が邦舞第二部、大和流「紫」で第一て参加、現在まで第一位七人、第二位六人、第三位六人が入賞しており畑代表も「みやこ賞」「特別指導者賞」を受賞しています。九月十四日（日）には邦舞、バレエ、児童舞踊、現代舞踊、創作舞踊等それぞれ上位三位までの入賞者によるアンコール公演が目黒パーシモンホールにて行われます。入場料二千五百円。

全曲を新しい振付で取り組んだ、アトリエ公演

【特別寄稿】

「愛燦々」

芸能日本社
主幹　乾　一郎

美空ひばりが遺した歌のことではなく、いま私は舞踊集団「菊の会」の代表尾上菊乃里こと畑道代女史のことを書きたいのである。

京都に生まれ九才で藤間亀三郎、後の初代尾上菊之丞師に入門、十四才で上京、十六才には家元の代稽古を仰せつかるまでになり、十八才で菊乃里の芸名を頂いた。以来家元が各劇場での振付の仕事にアシスタントとして歌舞伎、宝塚、日劇から東をどり、鴨川をどり、其他に付き添って廻り、見聞を博め勉強した。経歴を書けばきりがないが第一回リサイタルを東京宝塚劇場で行ったのは二十六才、其後家元の急逝に遭い、昭和四十七年舞踊集団「菊の会」を創立し今日に及んだ。卓れた才能は家元存命中二十数年間薫陶を受けた流儀の伝統を研鑽修得し、その確固たる基礎の上に起って、創作舞踊や、各地の民俗舞踊をエンタテイメント風に構成、振付して、アトリエ公演や洛北八瀬研修所で自主公演を重ねている。創作舞踊劇では「カッチャ行かねかこの道を」（昭和五十一年初演で文化庁芸術祭優秀賞を受賞）はじめ、「おけさ海を行く」「藍の女」等は殆んど十年間隔で再演、再々演を繰り返し、統一された余裕ある的確な演技を見せている。近年では大作「阿国かぶき」「追分の女」など好評の名作がある。

思うに菊の会の強味は、年間殆ど休みなく全国各地での公演をはじめ、欧米、アジア等二十余カ国での海外公演をもち、上演回数の推積が舞台演出に洗練味を増し、出演者の演技に磨きがかかっていることである。

畑さんが一昨年（２００１）ニューヨーク公演のためにプログラムとしてアルバムを編集製作され、体力を消耗し疲れた由承ったが、拝見するとよくぞこれ程までにと驚いた。豪華、美麗、一六〇頁（全文英文）に及ぶ大版のアルバムであった。豊富な公演記録写真の中には、恩師初代尾上菊之丞師と、Ｍｅｎｔｏｒ優れた指導者として六代目尾上菊五郎師と二人の姿が紹介されており、更に思わず目を見張ったのは、黒澤明監督の遺作「夢」のロケ撮影現場でのスナップ写真で、同監督と畑道代師、出演中の笠智衆や、菊の会門挙げての、あの意表を衝いた狐の嫁入りの、ユーモラスなキャラクターそれぞれの姿が掲載されていた。又「桃畑」の場面は内裏雛、公卿、官女、他五〇余名が雛段式にずらりと並んだ見事な大ロングショットで、俳優達が約一ヶ月間舞踊の特訓の結果、わずか数回のテストで黒澤監督からＯＫの出た美しい絵巻物の情景となった。

こうして映画「夢」の作品に於ける黒澤監督の奇抜な意図の実現に、畑さんならではの振付と努力が大きな功を奏していたのは確かであろう。

菊の会創立三〇周年を経て、この躍進、成功の源泉は、畑道代女史の並々ならぬ努力と舞踊芸術への強い愛情であろう。否それに止まらず門弟会員の指導に注ぐ豊かな愛、更には長年のコンビとなった作、演出者の三隅治雄先生への信頼と愛情、また、恩師初代尾上菊之丞師への尽きることなき尊愛の念、それら数々の愛が畑道代さんの胸に燦々ときらめいていることを確信するのであります。

しかし近来、日本の伝統芸能に接する機会が多くなり、日本人はもっと日本を知る必要があると痛切に感じるようになりました。

ところが近年の日本舞踊の世界は、ことさらに芸術至上的な傾向が強くなり、それが評価されることもあって、舞踊がごく一部の人々のものになってしまったようにも思います。しかし舞踊は本来は多くの人々のものではないでしょうか？

そんなことを考えている時に「菊の会」の舞台と出会いました。「カッチャ行かねかこの道を」は東北の農村を背景にした発想も手法も日本そのもののミュージカルでした。畑道代さんが庶民の代表的な女性を体当たりで演じて笑わせ泣かせてくれたのです。

感動を呼んだ 第五回「さつき会」

初夏の気配を感じる「こどもの日」五月五日には大田区教育委員会の協賛を頂き、大田区民ホール、アプリコ（大ホール）で八歳から二十四歳までの次代を担う未来の舞踊家による恒例の第五回「さつき会」が今年も盛大に開催されました。

第一部の開幕は可愛らしい少年少女による「石橋」「藤娘」。続いて若手女性メンバー五人立ちの華やかな「水仙丹前」。そして公演メンバーによる狂言舞踊「茶壺」。続く第二部の舞踊選集「新しい時を刻んで」では総勢五十名の若者が、爽やかに颯爽と全十四曲を躍りぬきました。

当日は一人一人が真摯に稽古に取り組んだ情熱が滲み、満員の客席から惜しみない拍手と声援がとび、未来に希望を感じさせる、素晴らしい意気込みで活気溢れる公演となりました。

「光に向かって」

早春三月には菊の会スタジオでの恒例の春のアトリエ公演が爽やかに開催されました。

演目は、女性三人立ちの「梅の栄」。続いて尾上菊十郎丈の指導による狂言舞踊「棒しばり」は難しい演目ながら、観客に大変喜んで頂ける舞台となりました。

第二部の舞踊選集「光に向かって」は畑道代が全曲新たに選曲、振付し取りみ、時代を捉えた斬新な出来映えで客席から盛んな拍手を頂きました。

6月1日(日)「おどりの広場」 入場無料
於・埼玉県栗橋町「ハクレン館」
時間:午前11時半～午後8時

待望の菊の会「おどりの広場」が埼玉県栗橋町でいよいよ開催致します。当日は賑やかな模擬店が数多く出店され、菊の会の華麗な舞台もあり、誰もが参加できる「輪踊りコーナー」もあって、心ゆくまで家族や友人と楽しく観て・踊って・食べて・飲んで・絆を深め、充実した一日を送って下さい。

7月4日(金)～6日(日)「京都アトリエ公演」
於・菊の会八瀬研修所
チケット料金 ¥4,500 全席自由 (当日券¥5,000)

比叡山から夏の涼やかな風が吹きわたり、高野川のせせらぎも爽やかな季節に、好評の八瀬研修所でアトリエ公演を開催致します。

常磐津「牡丹がさね」
狂言舞踊「棒しばり」
菊の会舞踊選集「光に向って」

開演時間	12時	3時	6時半
4日(金)	●	●	●
5日(土)	●	●	●
6日(日)	●	●	

8月9日(土)10日(日)「菊の会教室発表会」
於・板橋区立文化会館
9日 (前夜祭)午後5時開演 入場無料
10日 午後1時開演

毎年盛大に行われる教室発表会も演目が増え本年は二日間に渡って開催さる事になりました。菊の会ならではの充実した舞台を是非、ご覧下さいませ。

8月7日(木)8日(金)「夏祭り」
於・品川パシフィックホテル

昨年ご好評頂いた、パシフィックホテルの「夏祭り」に今年も菊の会が出演致します。
アトラクションステージでの華麗な舞台や盆踊り、そしてパシフィックホテルならではの美味しい屋台の味を存分にお楽しみ下さい。

自主公演「阿国かぶき」

12月2日　富士見市文化会館
12月4日5日　浅草公会堂
12月9日　サンシティ-越谷
12月11日　日野市民会館

歌舞伎の祖　阿国生誕400年に因み　三隅治雄作舞踊劇「阿国かぶき」を　かつて江戸三座を有し歌舞伎で栄えた浅草での開催を中心に各地で公演致します、どうぞご期待下さい。

8月23(土)24(日)
「南越谷阿波おどり」 入場無料

本場徳島とならび今や関東の夏の風物詩として定着した「南越谷阿波おどり」に今年も菊の会総勢50名が出演致します。
皆様のお越しをお待ち致しております。

kikunokai
インフォーメション
information

「大切に思うこと」 Coffee Break

プロフィル
安江小百合 *Sayuri Yasue*

1986年より畑道代に師事、イギリス、アメリカ、ネパールなど海外公演に参加、又、舞踊劇「おけさ海を行く」の花松役、「博多どんたく譚」の千代役など、様々な役柄に抜擢され、菊の会の中心メンバーとして活躍中。

Essay

私は、幼い頃「舞妓さんになりたい。」と言って、母を困らせた事があります。何もわからずに、ただ綺麗な着物を着たいと思っていたのだと思います。
つい先日、あるお子さんが、風呂敷を腰に巻いて、裾曳きの真似をして遊んでいる姿を見て、物が溢れている時代に、何んと自然な可愛いい発想」なのだろうと、微笑ましく、又、嬉しく思いました。
　最近、私も和裁を始め、一枚の布が見事に無駄なく使われ、着物として仕上がっていくのを見た時、あらためて先人が様々に工夫し、丹念に慈しみ育ててきた着物の歴史に感動致しました。布の模様を生かしながら、着る人に合わせて断ち、布に直角に針を入れ、裏表同じ細やかな針目で運針する。そして、汚れたら、縫い目を解いて洗い張りをして仕立て直す。物を使い捨てたり、粗末にしない心、そこに日本の文化があるのだと思います。
ある日、一人の友人が、新聞の切り抜きを皆に見せながら、憤慨して話をしていました。中国やベトナムで、日本の着物の縫製の技術が進み、コストも安く、品質も安定している。そして、着物を中国やベトナムから輸入している現状を日本人として恥ずかしいと思うし、悔しいと、言っていました。
無駄なものは切り捨て、大切なものを無くしていく現代の中で、日本にしかない四季の風情や情緒を美しくさりげなく醸しだせる着物の魅力を日本人として誇りを持って伝承してゆきたいと思っています。

編集後記

月日が経つのは早いもので今年もあっという間に五月を迎えてました。
菊の会の公演もお陰様で四季を通して充実した公演を行わせて頂ける様になりました。
菊の会の季刊紙「日本のおどり」も今後、さらに充実した内容で皆様にお届け出来ますよう担当者一同努力して参ります。